英米文学史講座 3

ルネッサンス II

シェイクスピア小伝 . . . . . 富原芳彰
シェイクスピアの史劇 . . . . . 菅　泰男
シェイクスピアの喜劇 . . . . . 杉山　誠
シェイクスピアの悲劇 . . . . . 小津次郎
シェイクスピアの詩 . . . . . 宮内文七
シェイクスピア批評史 . . . . . 中西信太郎
シェイクスピアの舞台 . . . . . 飯島小平
シェイクスピア上演史 . . . . . 三神　勲
シェイクスピア版本の歴史 . . . . . 土方辰三
日本におけるシェイクスピア . . . . . 西崎一郎
チューダー朝の翻訳 . . . . . 多田幸蔵
エリザベス朝の修辞学 . . . . . 大山敏子
ユーフュイズム . . . . . 山田泰司
エリザベス朝の筆蹟 . . . . . 大塚高信
エリザベス朝英語 . . . . . 山本忠雄
エリザベス朝の音楽 . . . . . 黒沢敬一

英米文学史講座　第三巻

ルネッサンス

II

1501—1625

研　究　社

The photographs by Roger Wood, Angus McBean, Pamela Chandler and Antony Armstrong-Jones were reproduced from SHAKESPEARE AT THE OLD VIC by the courtesy of THE OLD VIC THEATRE —ORION

英米文学史講座 第三巻
ルネッサンス II

昭和 36 年 2 月 5 日 印刷　昭和 36 年 2 月 15 日 初版発行
昭和 52 年 8 月 20日 11版発行

監修者 福原麟太郎
西川正身

発行者 山本友一 東京都新宿区神楽坂1の2

印刷所 研究社印刷株式会社 東京都新宿区神楽坂1の2

発行所 研究社出版株式会社 〒162
東京都新宿区神楽坂1の2
振替口座 東京7-83761番

3398-102003-1860

英米文学史講座

目　次

シェイクスピア小伝 . . . . . 富原芳彰 1
シェイクスピアの史劇 . . . . . 菅　泰男 18
シェイクスピアの喜劇 . . . . . 杉山　誠 38
シェイクスピアの悲劇 . . . . . 小津次郎 59
シェイクスピアの詩 . . . . . 宮内文七 86
シェイクスピア批評史 . . . . . 中西信太郎 103
シェイクスピアの舞台 . . . . . 飯島小平 121
シェイクスピア上演史 . . . . . 三神　勲 135
シェイクスピア版本の歴史 . . . . . 土方辰三 146
日本におけるシェイクスピア . . . . . 西崎一郎 160
チューダー朝の翻訳 . . . . . 多田幸蔵 175
エリザベス朝の修辞学 . . . . . 大山敏子 194
ユーフュイズム . . . . . 山田泰司 209
エリザベス朝の筆蹟 . . . . . 大塚高信 219
エリザベス朝英語 . . . . . 山本忠雄 231
エリザベス朝の音楽 . . . . . 黒沢敬一 244

英米文学年表 (1501-1625) 259
索　　引 269

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

シェイクスピア小伝

富原芳彰

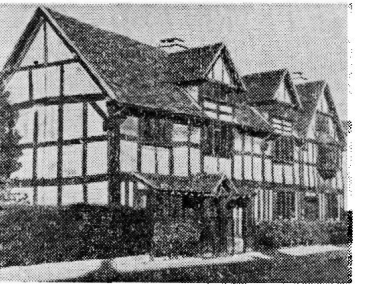
ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) は、1564 年の 4 月 26 日に、生地ストラットフォード・オン・エイヴォン (Stratford-on-Avon) の教会 (Holy Trinity Church) で洗礼を受けた。生れたのはそれより数日前であったであろう。彼の生誕の日を 4 月 23 日(彼が死んだのと同じ月日)に固定すべき積極的根拠はない。シェイクスピアが生れた 1564 年は、エリザベス治世第七年目に当るが、この年にはまたマーロウとガリレオが生れ、ミケランジェロとカルヴィンが死んでいる。その前年にはフォックス (John Foxe) の *The Book of Martyrs* (『殉教の書』) が世に出た。そのころわが国では、1560 年の桶狭間の戦で今川義元を破った織田信長が、全国統一の野望を抱いて、日夜上洛の機をうかがっていた。

シェイクスピアが生れたストラットフォード・オン・エイヴォンの町はイングランドの中部ウォリック州 (Warwickshire) の西南隅にある町で、ロンドンからの距離は 92 マイル (150 キロメートル)、今日では、朝 8 時ごろロンドンを出る観光バスに乗ると、この町をひととおり見物し、帰りにオックスフォードでかなりゆっくりしても、その日の夕方にはロンドンに帰って来る。十六世紀のストラットフォードも、駅馬車の定期便によって、オックスフォードはすぐ近くの町であったし、ロンドンも決して遠くはなかった。

十六世紀のストラットフォードの町は、周囲 10 マイル、人口 2,000 足らずの町であったが、近在の農産物の集散地として栄えていた。樹木の多い町の東をエイヴォン川の清流が流れ、岸には柳が長い枝を垂れ、水面には白鳥が遊んでいた。後年シェイクスピアを「エイヴォン川の白鳥」

('Sweet Swan of Avon') と呼んだのはベン・ジョンソンであった。町の周囲には、いまでもそうだが、美しい田園がひろがっていた。とくに北側には、当時は、美しい森林がつづいていた。それは *As You Like It* (『お気に召すまま』) のアーデンの森 (the Forest of Arden) のような森であったであろう。

シェイクスピアの父親ジョン・シェイクスピア (John Shakespeare) はストラットフォード・オン・エイヴォンから少し北に離れたスニッターフィールド (Snitterfield) という村の農家の出であるが、彼がいつからストラットフォードの町へ出て来て住むようになったかは明らかでない。しかし、1552 年 4 月 29 日に、彼がヘンリー街 (Henley Street) に許可なくして塵芥を積み上げたかどで罰金 1 シリングを課されたことが町の記録に残っているので、彼がストラットフォードに住みついたのがそれ以前であったことはまちがいない。


Shakespeare の「生家」

ヘンリー街というのは、町の北の方にある通りで、ここにシェイクスピアの「生家」(Birthplace) が今日でも残っているが、シェイクスピアが生れた当時、父親のジョンは町の中にこのほかにもいくつか家を持っていたので、詩人の生れたのが本当にこの家の中であったかどうかは、厳密に言うと、たしかではない。

ストラットフォードへ出て来たジョン・シェイクスピアは、いろいろの商売をしたらしい。一説には「手袋製造人」(glover) あるいは「皮革漂白業者」(whittawer) と伝え、十七世紀のゴシップ蒐集家ジョン・オーブリー (John Aubrey, 1626-97) は彼の職業を「屠殺人」(butcher) と言っている。これらは要するに一連の職業内容を部分的にとらえて呼んだもののように思われる。1709 年にシェイクスピアの組織的な伝記をはじめて書い

たニコラス・ロウ (Nicholas Rowe, 1674–1718) は、彼の職業を「羊毛商」(wool-dealer) としている。その他、大麦や材木の売買をしたように伝えている文献もある。いずれにしても、彼が商売において成功し、町で有数の金持になり、町政の要職を歴任したことは、記録によって明らかである。シェイクスピアが生れた 1564 年には、彼は町の収入役 (chamberlain) をつとめており、その年の疫病流行に際して彼が貧民救済のために投じた寄付金は非常に多額であった。シェイクスピアが生れた翌年には彼は助役 (alderman) になり、1568 年にはついに町長 (bailiff) に推された。しかし、どうしたわけか、1577 年ごろからは家運が傾いたらしく、そのころからジョンはしきりに借金取りに責め立てられるようになり、公職からも姿を消し、貧民救済の寄付金も免除されるようになった。シェイクスピアが大学へ行かなかった一つの理由は、こうした家庭の事情によるところもあったと思われる。

ジョン・シェイクスピアは、1557 年ごろ、近在の豪農ロバート・アーデン (Robert Arden) の末娘メアリ (Mary) と結婚した。メアリの実家はそのあたりの旧家で、カトリックの家であった。したがって、エリザベス女王治下のカトリック教徒迫害の時期には苦しんだと言う。一説に、ジョン・シェイクスピアもカトリック信者であり、彼の町政からの突然の引退や家運の傾きもこれと関係があるとする見方もあるが、彼の信仰については正確なことは知られていないので、早急の判断は危険である。

ジョンとメアリとの間には、少くとも 10 人の子供が生れたが、後の詩人ウィリアムはかれらの三番目の子供であり、長男であった。姉二人は幼少のうちに死んだ。

ウィリアムの少年時代についてはほとんど何の記録も残っていないが、彼が 1571 年ごろ、ストラットフォードの文法学校 (Grammar School) に入り、数年間そこに学んだということは、大体確実だとされている。その文法学校の教室は二階にあったが、その一階は町の集会所 (Guildhall)

で、シェイクスピアの父親が評議員の一人として、あるいは議長となって、町政の運営を議したところである。また町を訪れた旅廻りの役者たちが芝居をしたのもここであり、1569 年にはシェイクスピアの父が町長としてそういう役者たちをこの集会所に迎えている。シェイクスピアは「わずかのラテン語とそれ以下のギリシア語」(“small Latin and less Greek”) しか知らなかったというベン・ジョンソンの言葉は、シェイクスピアの修学程度に言及した言葉として有名であるが、これを言ったベン・ジョンソンは古典主義の一代の驍将であったことを考慮に入れた上で聞くべき言葉であろう。ストラットフォードの文法学校には、オックスフォードやケンブリッジ出身の優秀な教師が来ており、ラテン語教育も相当高度にまで及んだとする見方をする人が今日では多い。

The “Chandos” Portrait

州で言えば西隣りの州に入るが、ストラットフォード・オン・エイヴォンからはすぐ近くに、ウスター (Worcester) という大きな町がある。ストラットフォードを含む大教区の中心の町であるが、そのウスターの大寺院の記録の中に、シェイクスピアの結婚の事実を証するものが残っている。1582 年 11 月 27 日に結婚許可が下りたことが記され、翌 28 日付で、この結婚が正当なものであることを司教に対して保証する保証人二名連署の証文が入っている。ただ花嫁の名前が、証文ではストラットフォードのアン・ハサウェイ (Anne Hathaway. この証文の綴りでは Hathwey) となっているのに、結婚許可証の方ではテンプル・グラーフトンのアン・ウェイトリー (Anne Whateley of Temple Grafton) となっている。そこでいろいろの臆測も出て、シェイクスピアはそのころ単純でない女性関係を持っていたのではないかと疑う人もいるわけだが、元来証文の方が先にあるものであり、教会の書記が同様の場合に同様な誤記を犯している例は他に

もあるので、ここでも、結婚許可証の上に重大な職務上の過失は犯されているけれども、それ以上に意味のあるものではないと考えるのが普通である。

ストラットフォード教区にはハサウェイという家が数軒あったが、シェイクスピアの妻となったアンは、ストラットフォードの町から西へ約1マイル離れたショッタリー(Shottery)という村の豪農リチャード・ハサウェイ (Richard Hathaway) の娘であったとするのが定説である。いまでもそこに「アン・ハサウェイの家」(Anne Hathaway's Cottage) というのが残っていて、これも見物の名所の一つになっている。

結婚の時、シェイクスピアは 18 才半、花嫁のアンは 26 才、花婿よりは 8 才年上であった。そして二人の結婚の式は、既成の事実を正式化するものであり、やや急いで挙げられたものであったと想像される。というのは、それから5ヵ月にして長女スザンナ (Susanna) が生れ、1583 年5月 26 日にはその洗礼が行なわれているからである。つづいて 1585 年 2 月 2 日には長男ハムネット (Hamnet) と次女ジュディス (Judith) とが洗礼を受けている。この二人は双生児であった。

シェイクスピアがいつロンドンに出て来たか、どのようないきさつを経て劇場の人となったかは、明らかでない。しかし、1592 年の 9 月に出版されたロバート・グリーン (Robert Greene, 1560–92) の *A Groatsworth of Wit Bought with a Million of Repentance* (『後悔万両智慧一文』) の中につぎのような言葉が出て来て、これが文献の上において、シェイクスピアのロンドン劇壇への登場を最初にわれわれに伝えている。グリーンは、役者にくらべて芝居の作者の仕事がいかに割の悪いものであるかを嘆き、朋輩に芝居の作者になどなるものではないと忠告し、つづけてつぎのように書いている。

> 現にいまわれわれの羽でもって飾り立てた成り上りの鴉がいて、こいつは虎の心を役者の皮で包んで、自分もお歴々に劣らず無韻詩をぶてる

と思いこんでいる。まったくの何でも屋で、われこそは天下唯一人のシェイク・シーン [舞台を震撼させる者、の意] だとうぬぼれている。

(. . .there is an upstart Crow, beautified with our feathers, that with his *Tiger's heart wrapt in a Player's hide*, supposes he is as well able to bombast out a blank verse as the best of you: and being an absolute *Johannes fac totum*, is in his own conceit the only Shake-scene in a country.)

ここに出て来る 'Shake-scene' というやや奇抜な造語は Shakespeare の名にかけたものであろう。また文中「虎の心を役者の皮に包んで」は、シェイクスピアの最初期の作とされる史劇 *Henry VI* (『ヘンリー六世』) 第三部の第一幕第四場 137 行目、「おお、虎の心を女の皮で包んだ奴!」(Oh, tiger's heart wrapt in a woman's hide!) のもじりであることは明らかである。かくしてわれわれは、グリーンの上記の書が出た 1592 年の秋までには、シェイクスピアはロンドンにおいて、芝居の役者として、また作者として、先輩のねたみを買うまでに華々しい存在になっていたと考えることができるのである。

The "Droeshout" Portrait

シェイクスピアがいつどのようにして故郷ストラットフォードの町を出たかということも明らかには知られていない。1585 年の 2 月に二人の子供の洗礼が行なわれていることから、1584 年の春ごろまでは彼もまだストラットフォードにいたことはほぼ確実であるが、それ以外のことは空漠たることになってしまう。1584 年にシェイクスピアは 20 才であったはずである。それから 1592 年にいたる約 8 年間の消息が杳として絶えていることは、シェイクスピアの伝記の上における一大欠陥である。20 才から 30 才近くにかけての時期は、一個の人間の形成の上にとくに重要な意味を持っている時期である。この時期のシェイクスピアについて

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

われわれが何ものも正確に知り得ないと言うことは、残念以上のものがある。むろん、この 8 年間の空白を埋めるために、学者たちはすでに多大の努力を傾注した。しかし、残念ながら、推測はたくさんあっても確証は一つも発見できず、この点に関してはどうやら絶望的というのが今日の状態である。

シェイクスピアという劇作家は存在しなかったという説、シェイクスピアの作品としてわれわれが知っているものを書いたのは別の人、あるいは別の人たちであったという説、要するにシェイクスピア他人説というものが、早くは十八世紀の半ばごろから一部にあり、とくに前世紀の半ばごろアメリカにおいてやや喧伝されて、今日でもなお一部には存在するが、こういう説がともかくも成立しうるのも、要するにシェイクスピアの伝記の不備、とくに上記の 8 年間の空白がシェイクスピアの生涯の連続をあまりにも大きく断ち切っているという重大な欠陥が、さまざまの推測に介入の余地を与えているからにほかならない。

シェイクスピアがストラットフォードを去った動機について、有名な伝説がロウその他によって伝えられている。いわゆる鹿泥棒の話である。シェイクピアは彼の地方の名家ルーシー家の養鹿園から鹿を盗んで発覚し、その家の当主サー・トマス・ルーシー (Sir Thomas Lucy) から告訴されて処罰を受けた。そこでシェイクスピアはサー・トマスをからかうざれ歌を書いて仕返しをした。サー・トマスはそのため一段ときびしい追及を彼に加えたので、彼はついに故郷の町にいられなくなってロンドンへ出奔したというのである。この話はロウのほかに 3 人の人が独立に書き残しているというが、*The Merry Wives of Windsor* (『ウィンザーの陽気な女房たち』) で判事シャロウ (Justice Shallow) がフォールスタッフ (Falstaff) のいたずらをぼやく場面がこの伝説と内容がよく似ているので、この伝説はこの芝居の場面から逆に作り出されたものであろうとの説もある。

故郷の町を去った後約 8 年間のシェイクスピアの消息は、前に述べたと

おり、正確には何もわからない。ロンドンへ出て来る前に彼は田舎で（一説にはストラットフォードの文法学校で）教師をしていたのではないかという説を立てる人もいる。学校ではなく、地方の貴族の邸に住み込んで家庭教師をしていたらしいと考える人もいる。鹿泥棒の一件で故郷に居にくくなった彼は、折から対スペイン戦の兵士を募っていたレスター伯 (Earl of Leicester) の許に赴き、オランダ地方で戦ったと推測する人もいる。しかしいずれも推測の域を出ず、8 年の空白感を消し去るには足りない。当時のロンドンは興隆する国の首府として、新しい通商の都として、急速に繁栄を加えていた。したがってそこに人生の何らかの機会を求めて田舎から上京して来る若者の数は多かった。シェイクスピアもおそらくそういう若者たちの一人であったのではないか。

シェイクスピアがロンドンへ出て来た時、ロンドンには少くとも二つの劇場がすでに建っていた。1576 年に創設されたイギリス最初の公共劇場ザ・シアター (The Theatre) と、翌 1577 年創設のカーテン座 (The Curtain Theatre) とである。この二座につづいて建ったローズ座 (The Rose Theatre) の創設は 1588 年であるから、これがシェイクスピアの上京の時より前であったか後であったかは断定できない。ロンドンへ出て来たシェイクスピアは最初の二座のいずれかに雇われて、「はじめは非常に下っぱの仕事をしていた」(ロウ) と言われ、具体的には、木戸口でお客の馬をあずかる役で、彼はこの仕事に大いに練達の腕を示したという伝えもある。この具体的な話は、歌劇 *The Siege of Rhodes* (『ローヅ島攻囲』1656) を書いた十七世紀の劇作家で、みずからシェイクスピアの私生児だと称したサー・ウィリアム・ダヴィナント (Sir William D'Avenant, 1606-68) が語ったものである。このダヴィナントがシェイクスピアの私生児であるということをまじめに受け取る人は少いけれども、かりにダヴィナントの言っていることが本当だとすると、彼の母親は、シェイクスピアがロンドンと故郷ストラットフォードとの間の往復に常に立寄ることも可能であっ

The "Jansen" Portrait

たオックスフォードの宿屋「王冠屋」(Crown Inn) の女将であり、シェイクスピアの *Sonnets* (『ソネット集』) の「黒い婦人」(Dark Lady) のモデルが臆測される場合に候補としてあげられる女性の一人であり、ということになって、話はひろがって行くけれども、ここにも確証と言うべきものはない。ダヴィナントがシェイクスピアの私生児であったという話のほかに、シェイクスピアが彼の教父 (godfather) であったという話もある。これも、そうであったかも知れないし、そうでなかったかも知れない。

1592 年と 93 年には、ロンドンに疫病の大流行があり、劇場は閉鎖され、俳優も離散した。1594 年の春、疫病も一応収まったところで、当時悲劇俳優として劇壇の大立物であったエドワード・アリン (Edward Alleyn, 1566–1626) が、旧宮内大臣一座と旧海軍大臣一座とから俳優を集めて臨時に一座を編成し、しばらくロンドンで芝居をしたことがあったが、六月半ばごろこれがまた二座にわかれ、アリンとこれに従う人々は、改めて海軍大臣の眷顧を得て、テムズ河の南岸のローズ座で新しく旗上げした (Lord Admiral's Company)。これに対して、旧宮内大臣一座系の悲劇俳優であるリチャード・バーベッジ (Richard Burbage, 1567?–1619)、喜劇俳優ウィリアム・ケンプ (William Kemp, *fl.* 1600) などは、アリンらと袂を分って、宮内大臣ハンズドン卿 (Henry Lord Hunsdon) の眷顧を得て、新たにまた宮内大臣一座 (Lord Chamberlain's Company) を数週間遅れて結成し、この方はロンドン市を北に出はずれたショアディッチ (Shoreditch) にあったザ・シアターに拠った。シェイクスピアはこのとき後者、すなわち北の一座に加わり、やがて大幹部の一人となり、ほとんど一生をこの劇団と共にするようになった。北の劇場ザ・シアターは、リチャード・バーベッジの父ジェイムズ・バーベッジ (James Burbage,

d. 1597) が建て、かつ所有する劇場であった。

宮内大臣一座に加わったころまでに、シェイクスピアは、*Henry VI*(『ヘンリー六世』) 三部と *Richard III* (『リチャード三世』) という、いわばバラ戦争を中心とする史劇四部作を書き、また *The Comedy of Errors* (『まちがいの喜劇』)、*The Taming of the Shrew* (『じゃじゃ馬馴らし』)、*Titus Andronicus* (『タイタス・アンドロニカス』) などを書いていたと推定されるが、これらはとくにどの劇団のために書かれたというものではなく、これらを上演した劇団は三つにわたっている。しかし、シェイクスピアが宮内大臣一座の人となってからの彼の作品は、みなこの劇団のために書かれ、この劇団によって初演されるようになる。

実はここで、シェイクスピアの正典 (canon) の決定と、作品の執筆年代決定という、かなり厄介な問題が出て来る。しかしここではそれについて述べている余裕はない。ただシェイクスピアの正典 (シェイクスピアはどれだけの作品を書いたか) の問題については、今日一般にシェイクスピアの作品として認められているものは、そう認めて誤りではないというのが、さまざまの考慮がなされた上でなおかつ残るもっとも妥当な見解であると言ってよい。各作品の執筆年代も、今日では大体一定して来てはいるものの、推定による部分が非常に多いので、細部においては学者間に意見の一致を見ないところもまた少くない。今日では E.K. チェインバーズ (E.K. Chambers, 1866-1954) の推定に従うのが普通で、本稿でもそれによっている。ちなみに、シェイクスピアには、日記や手紙はもちろん、自筆の原稿と確認できるものは一枚も残っていない。

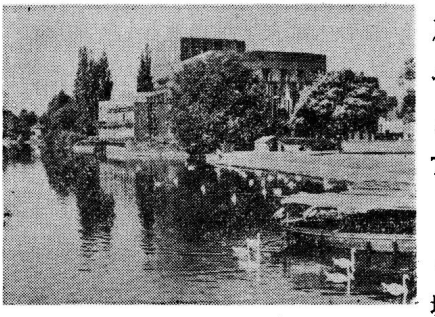
1592 年と 93 年にロンドンに疫病が流行して劇場が閉鎖されていた間に、シェイクスピアは二つの物語詩を書いたようである。*Venus and Adonis* (『ヴィーナスとアドーニス』 1593) と *The Rape of Lucrece* (『ルークリース凌辱』 1594) とがそれで、いずれもサウサンプトン伯ヘンリー・ライオスリー (Henry Wriothesley, Earl of Southampton, 1573-1624) に献じられ

Westminster Abbey にある Shakespeare 像

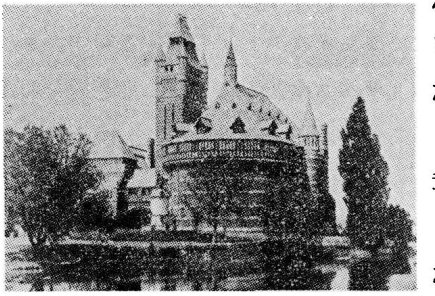
ている。この人は文学眷顧者として知られているが、とくにシェイクスピアとは交情が深かったようである。シェイクスピアの *Sonnets* で詩人の愛の対象となっている美貌の貴公子は彼であったという説もある。この *Sonnets* も、その大部分は 1593 年から 96 年にかけて書かれたというのがチェインバーズの推定である。

1594 年から 95 年へかけてのクリスマスの季節に、シェイクスピアの属する宮内大臣一座はエリザベス女王の宮廷で二度芝居をしたことが、宮廷の会計簿の記載によって知られる。そこには、一座の代表として、ケンプ、バーベッジと並んでシェイクスピアの名が記されている。この一座はその後もしばしば宮廷で演じたが、以後の出演料支払は一座の代表者としてジョン・ヘミング[ズ] (John Heming[es], *d.* 1630) になされているので、宮廷会計簿にはシェイクスピアの名はその後現われない。なおこのヘミングは、同じ一座の僚友ヘンリー・コンデル (Henry Condell, *d.* 1627) とともに、シェイクスピアの死後 7 年たって出版された彼の最初の戯曲全集、いわゆる「第一・二つ折本」(First Folio) を編纂した人である。

1595 年ごろまでには、シェイクスピアは、すでに上に名を挙げた作品のほかに、*Two Gentlemen of Verona* (『ヴェローナの二紳士』)、*Love's Labour's Lost* (『恋の骨折損』)、*Romeo and Juliet* (『ロミオとジュリエット』) の三作を加えた。つづいて書かれた *A Midsummer Night's Dream* (『真夏の夜の夢』) は、祝婚劇と言った趣きを具え、誰か貴人の婚礼に際して書かれたものであろうと想像されるが、誰のために書かれたかは、推測はあるが確証はない。またこのころ、シェイクスピアは *Richard II* (『リチャード二世』) を書き、すでに四部作で扱ったバラ戦争のそもそもの起因に筆を



The Shakespeare Memorial Theatre, Stratford-on-Avon (Opened in 1932)



The first Shakespeare Memorial Theatre (1879-1926)

及ぼした。*King John*(『ジョン王』)や *The Merchant of Venice*(『ヴェニスの商人』)もこのころ、1596-7 年の作である。

1596 年の 8 月 11 日には、シェイクスピアの息子ハムネットの埋葬がストラットフォードの教会に記録された。ハムネットはわずか 12 才で、おそらく父親のこともよく知らないでこの世を去った。

同じ年の 10 月 20 日には、紋章院長官から、ストラットフォードのジョン・シェイクスピア、すなわち詩人の父あてに、家紋を定めてこれを使用することを許す旨の許可状が下りている。これの申請はシェイクスピアが父親の名で行なったものであるらしく、彼が自分の社会的地位の向上を自覚したことを思わせると同時に、それが公認されたことをも物語るものである。かくしてシェイクスピアは、父親の死後はその身分を継いで 'Gentleman' と称する資格を得たことにもなった。

同じ年、ウィリアム・ウェイト (William Wayte) なる人が、シェイクスピアおよび二人の女性を含む 4 人を相手どり、生命の安全保障を当局に願い出ている文書が 1931 年に発見されたが、この事件の詳細は不明である。

1596 年には、ジェイムズ・バーベッジが旧ドミニコ派修道院の講堂を買入れ、劇場に改装して、ブラックフライアーズ座 (The Blackfriars

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com